審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2961 号	氏名	佐藤 寿洋
審査担当者	主 査	大島孝一	(印)
	副主査	島村均司	(印)
	副主査	古賀浩徳	(印)

主論文題目： Clinicopathological Study of Resections of Intraductal Papillary Neoplasm of the Bile Duct
(胆管内乳頭状腫瘍切除例の臨床病理学的検討)

審査結果の要旨（意見）

胆管内乳頭状腫瘍(IPNB)は、拡張した胆管内に乳頭状増殖を示す上皮性腫瘍で、組織学的に高分化型の乳頭状腺癌あるいは境界病変で、膵管内乳頭粘液腫瘍(IPMN) に類似している。今回、病理的検討を、104 例に行った。粘液産生は IPMN 群が IPNB 群に比べ優位に高く、亜型および組織学的異型度の比較では両群共に種々の程度に認められた。各種亜型および各異型度の比率に統計学的有意差が認められた。IPMN は結節内に異なる異型度の組織像が認められたが、IPNB には認められなかった。予後は両群共に比較的良好であった。IPNB は IPMN と共通する臨床組織学的特徴を有した。また IPNB の亜分類にも共通する特徴が認められ、新たな疾患概念となり得る可能性が示され、審査にあたり、主査・副査より、今後の展開、また実験系の可能性に対する質問にも的確に回答が得られている。この論文は充分に学位に値するものと考えられる。

論文要旨

胆管内乳頭状腫瘍(IPNB)は、拡張した胆管内に乳頭状増殖を示す上皮性腫瘍である。組織学的に高分化型の乳頭状腺癌あるいは境界病変で、膵管内乳頭粘液腫瘍(IPMN) に類似している。IPMN は肉眼型や組織形態と粘液形質の発現により亜分類され、疾患概念や診断と治療に関するコンセンサスは得られている。胆道と膵は解剖学的にも発生学的にも類似性があり、IPNB が IPMN のカウンターパートとみなされることは一定の説得力があると思われる。本研究は IPNB の臨床病理学的特徴や IPMN と関連性を明らかにすることを目的とした。

胆道および膵臓内に乳頭状発育を示す腫瘍として切除された 104 例を対象とした。粘液産生は IPMN 群が IPNB 群に比べ優位に高かった。亜型および組織学的異型度の比較では両群共に種々の程度に認められた。各種亜型および各異型度の比率に統計学的有意差が認められた。IPMN は結節内に異なる異型度の組織像が認められたが、IPNB には認められなかった。予後は両群共に比較的良好であった。IPNB として切除された 28 例を中沼らの提唱する分類に基づいて検証を行ったところ、すべてではないがその特徴が反映されていた。

IPNB は IPMN と共通する臨床組織学的特徴を有した。また IPNB の亜分類にも共通する特徴が認められ、新たな疾患概念となり得る可能性が考えられた。